



東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 173 April. 1. 2023

発行 公益社団法人
日本山岳会東海支部

〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMビル

電話：052-332-8363 FAX：052-322-7924

郵便口座 00800-5-13749 「日本山岳会東海支部」

銀行口座 三菱UFJ銀行 覚王山支店

普通1222073 「日本山岳会東海支部」

編集 星 一男

印刷 (有) アジマプリント



第18回東海岳人写真展から『湖面に映る立山三山』松本陽子会員 本文P3参照

目次

○令和5年新年会報告	今津英一朗	2	○随想 回想の登頂記⑤	杉浦吉治	16
○「第18回東海岳人写真展」			○委員会報告 山行/亀の会		20
開催報告	伏屋 満	3	自然保護/東学連		
○「春山気象講座」報告	高松信治	4	○同好会コーナー	福井雅子	23
○追悼 石原國利さん	尾上 昇	6	○支部友コーナー	田中 進	24
○登山用具あれこれ⑦	千葉泰丈	8	○会務報告	今津英一朗	25
○トピックス		9	○ルーム日誌・会員異動	今津英一朗	28
○山書蒐集夜話 その4	安藤忠夫	10	○INFORMATION	星 一男	29
○東海支部蔵書からの一冊35	石田文男	13	○編集後記		

令和5年新年会報告

総務委員長 今津 英一郎

令和5年日本山岳会東海支部新年会は、令和5年年1月15日(日)15:00から名古屋市中区のテレビ塔北のSNOWPEAK EAT栄にて開催された。

冒頭、高橋支部長の年頭の挨拶につづいて、来賓としてお越しいただいた本会会長の古野 淳氏からお祝の言葉をいただいた。

第一部 報告会

最初に草野 駿希氏の「北アルプス一筆書」が、2題目には、第14次インドヒマラヤ隊の沖総隊長、星隊長、栗木登攀隊長、隊員の印藤夫妻が参加し、報告を行った。最後に山田利行氏によるマナスル・アマダブラム速攻登山の報告が行われた。

速攻登山とは、クライミングのグレードと同様に、最速タイムをめざす登攀スタイルである。

山田会員の今後の登攀活動に、更なる支部会員からのバックアップが期待される。

第二部 懇親会

報告会終了後、同じ会場で約3年ぶりとなる新年の懇親を行った。再開できたことで、皆笑顔の内



山田利行氏



第14次インドヒマラヤ隊



に時間があっという間に過ぎて、19時に解散となった。その後も各自で2次会となったことは言うまでもない。

全体では、約60名の参加があり、感染対策を徹底した取り組みとなった。

皆様のご協力に感謝いたします。

← 新年会の会場風景

「第18回東海岳人写真展」開催報告

写真展実行委員長 伏屋 満

2023年2月21日(火)から26日(日)、名古屋市民ギャラリー栄(名古屋市中区)7階第3、第4展示室において、第18回東海岳人写真展を開催した。

会員33名から48点の出展を集めて展示し、期間中の来場者は1,001名を数えた。これは、2年前の第17回に比し、出展数では、4割減、来場者では5%の増加であった。

前回との比較として、出展数では、前回の作品募集は新型コロナウイルス感染症が蔓延する前の3年前であったのに対して、今回は、外出規



第18回写真展の紹介記事(出展：中日新聞 2023/2/22 県内版)



キャプションを読む来場者



会場風景

制が長引いて山行そのものが減り、撮影機会が減ったためである。特に海外作品が大きく減っており、新しいものでは東海支部60周年記念のインドヒマラヤ登山だけであった。

一方、来場者に関してはわずかな増加だった。新型コロナウイルス感染症に係る行動規制緩和や、他の展示室での開場、共催者である中日新聞の報道がプラス要因であった。

展示に関する特徴として、キャプションに撮影者のコメントを載せた。一般的な写真展では、写真そのものの表現がものを言うが、当写真展では、撮影者の山行での情景・印象について言葉でも見学者の共感を呼んでいた。かつてのアルピニストの方々には自分の体験を

重ねていたようだ。

今回の写真展に当たっては、前回の写真展終了後から出展数の減少が危惧されたので、出展をし易くするため、作品作りの助力と、出展費用や作品サイズの多様化を行った。

1、写真教室の開催

ほとんどの方が山行時に何らかの撮影機材を持参されているが、撮影法や撮影後の画像処理、プリント等考慮されない方が多い。そこで、写真展実行委員会では、外部講師による写真教室を3回行い、更に写真展応募作品の選定やレタッチも指導した。参加者は少なかったが好評で、応募作品にも反映された。

2、作品パネルの選定

新たな会員が少しでも気軽に応募できるようにするため、従来より小サイズの写真にも対応し、出展費も抑えたパネル材質を選定した。具体的には、写真サイズをA2とA3の2種類とし、パネル材質を軽量の硬質スチレン製とした。これにより、A3判では出展費が従来より半額以下に抑えることができた。展示を終えたパネルは自宅等でも気軽に掲示できる仕様となっている。



終了後会場にて

『春山気象講座』報告

遭難対策委員長 高松 信治

令和5年3月4日、OMCビル4F講堂をお借りして春山気象講座を開催しました。

講師には、ヤマケイオンラインのコラム記事やペンギンおやじのお天気ブログでおなじみの山岳防災気象予報士の大矢康裕氏をお招きしました。氏は2021年9月にはヤマケイ新書から「山岳気象遭難の真実」を出版されるなど山岳気象の第一線で活躍しておられます。受講者は会場参加37人、Webでの参加15人。多くの方に真剣に受講していただきありがとうございますところ です。

この気象講座は登山学校運営委員会と遭難対策委員会の共同開催で行っているものです。登山学校の生徒など初心者をお優先受講とさせていただきましたが、会場受講の他、リモート参加も可能となっており、広く支部関係者に無料受講いただけるものとしています。この講座について多くの方に知っていただき参加促進を図るため支部報の1月号に合わせて案内ビラを支部全体に配布し、メルマガでも開催を案内しました。



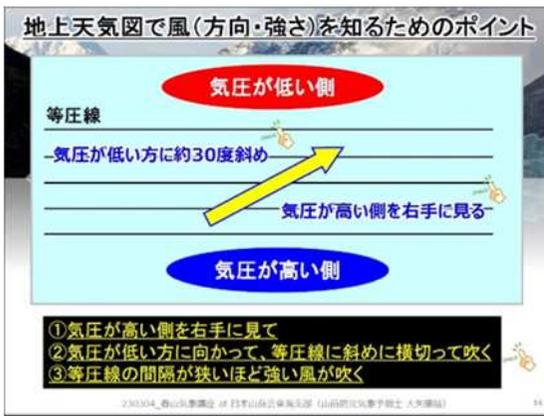
これまで、夏山と冬山の気象講座を年2回開催してきましたが、今回は、初心の方が雪山の登山にチャレンジする貴重な機会となっている春山にフォーカスを当てた講座としました。山を閉ざしていた雪や氷が緩む春山シーズンは、一方でこの時期特有の気象条件などにより多くの遭難事故も発生していることから、春山登山での気象遭難の絶無を図るためには、春山に特化した気象知識を得てもらうことが重要と考え、春山気象講座開講の運びとなりました。

講座の主な内容は、講師の経験談も含めた自己紹介の後、春山の気象の基本を押さえた後で、北アルプス鳴沢岳の遭難と那須岳の雪崩遭難事故を題材として、遭難事故になってしまった原因と、それではどうしたらよかったのかを考えました。その後は、気象の把握に有用なアプリの紹介、参加者からの質問に答えるものでした。

春山の気象の基本では、移動性高気圧（春に三日の晴れなし）、日本海低気圧、南岸低気圧、二つ玉低気圧の春によく見られる天気図が示され、気圧が高い側を右手に見て、気圧が低い方に向かって、等圧線に斜めに（約30度斜め）横切って風が吹く事を当てはめて、会場で風の方向やその変化を一緒に理解し、疑似好天発生のメカニズムなどを理解するものでした。

また、急激な天候の悪化による強風によって体温が奪われ、低体温症が加速度的に進行、

A flyer for the 'Spring Mountain Weather Lecture' (春山気象講座) held on March 4, 2023. The flyer features a photograph of a snowy mountain peak. The text provides details about the event, including the date and time (15:00-17:00), the location (OMC Bldg. 4F), and the speaker, Takahashi Takahiro (大矢康裕). It also mentions that the lecture is free of charge and includes a Q&A session. The flyer is designed with a green and white color scheme and includes the logo of the Tokai Section of the Japanese Alpine Club.



悪化する事例が紹介されました。

遭難事故では、疑似好天にさそわれテントを出発したが、森林限界を抜け猛吹雪にさらされても突き進んでしまった3名の登山者が離れ離れとなり亡くなった鳴沢岳の遭難事例や、天気が悪く予定していた登山を中止し、急遽ラッセル訓練に変更したが、降雪に対して無警戒で、南岸低気圧の情報を知らなかったのかあるいは知っているも活用せず、雪崩の危険性が高い場所で休憩し、雪崩発生時には不適切な指示をしたなどにより、死者8名、怪我40名を出した那須岳雪崩遭難事故の事例を紹介し、判断ミスによる人災の恐ろしさを共有しました。

役に立つ気象アプリ“Windy”の紹介の後、質問に答えるコーナーでは、参加者からは事前に寄せられた質問に答えていただく事から始まりました。

高層天気がわかりやすいものがあるか。激烈になりつつある気象変動が今後どうなっていくのか。三寒四温はなぜ起きるのか。疑似好天は二つ玉低気圧だけで起きるのか。二つ玉低気圧は予測できるのか。爆弾低気圧の発生は予想できるのか。低体温症が発生しやすくなる危険ラインはあるか。雪崩が懸念される状況は何かなどの質問に、分かりやすく答えていただきました。

また、事前に気象図や天気予報を確認していれば防げたのであろう気象遭難の事例はあるか？との質問には、「気象遭難はほとんどの場合何らかの判断ミスが原因となっており、

事前に天気図や天気予報を確認していても、そこにどのようなリスクがあるのかを読み取って、行動に落とし込まないと遭難事故を防ぐことはできない。その意味で単に気象図や天気予報を確認していれば防げた事例は存在しない。逆にしっかりとリスクマネジメントができていれば、ほとんどの気象遭難事故は防ぐことができたのではないかと考えている」との答えをいただきました。さまざまな情報や知識を得ても、それを現場で行動にうつせるように事前にリスクを明確化して準備をしておくことの大切さを考えさせられました。

この講座の運営などに登山学校運営委員会と遭難対策委員会の委員が参加しました。

今回はZoomの設定に戸惑ってしまい、開始時に15分ほどのタイムロスが発生してしまい、講師・受講者にご迷惑をかけました。比較的にやりなれてきたと思っていたWebを利用した講習ですが、それに利用するZoomに関するID、パスワードなど情報の共有徹底が大切との教訓を得たと思います。



受講会場にて

今後も、ニーズにあったタイムリーな気象講座を通じて、受講者に気象の知識を吸収していただき、安全登山を進めていきたいと思っています。

追 悼

石原國利さん追悼

尾上 昇

東海支部のレジェンドがまた一人旅立った。名誉支部員の石原國利さん（会員番号5180）である。本年1月29日、享年94歳、大往生である。

東海支部は、1961年5月、石岡繁雄さんを中心にして設立された。石原さんは、石岡さんの愛弟子ということもあって、石岡さんと共に支部の設立に奔走している。設立後も、多忙な石岡さんに代わって、当初から常務委員として支部運営の中心を担っていた。

石岡さんは、周知の通り、戦後の日本の登山界の復興に多大な功績を残した人である。屏風岩の初登攀、地方の一高校の山岳部OB会をルーツとする「岩稜会」を日本有数の山岳会に育て上げ、一方で写真集「穂高の岩場」を刊行、そして東海支部の設立である。

さらには「岩稜会」の山行で起きた※ナイロンザイル事件でザイルの切断の原因究明に心血を注ぎ、社会問題にまでなっていることは、あとあとまでの語り種となっている。

この「岩稜会」の一員であった石原さん、登攀歴もなかなかのものである。「岩稜会」は、活動の場が穂高中心であったが、石原さんは、余り注目されていなかった明神岳の岩場に注目、この開拓に力を注いでいる。中でも困難視されていた五峰赤壁の中央ルートにそれぞれ1960年と1961年に無雪期と積雪期の初登攀を記録している。

また、海外にも足跡を残している。1960年の夏のジュガール・ヒマラヤのビック・ホワイトピークと1966年の東海支部最初の海外遠征、南米アコンカグア南壁である。アコンカグア隊では、この時は、須賀太郎初代支部長から後を引き継ぎ、第2代支部長の傍ら自ら副隊長となって隊をリードしている。さらには、マカルーの許可取得交渉に単身カトマンズに乗り込むなど石原さん、まさに八面六臂の大活躍であった。

この時の支部は、ヒマラヤ遠征を巡って右往左往の混乱状態にあった。最初のヒマラヤ遠征のローツェ・シャール計画が挫折、その直後にヒマラヤ登山禁止令の発出、止むを得



ずのアコンカグアへの転進、その後のヒマラヤマカルー峰への計画が延期。何としてもヒマラヤへと執念を燃やす連中のフラストレーションは溜まる一方であった。

只でさえ口やかましいのに、こんな状況下では尚更、彼等の言動は激しくなる一方だ。ローツェ・シャール計画で早大と許可を挟んで揉めた時、その仲裁役に立った当時の日本山岳会の望月達夫副会長に、「お前らは、ヤクザの集団か」と一喝される一幕もあったとか。

いささかオーバーな表現であるが、まるで過激派集団である。名前を挙げるなら、橋村一豊、中世古隆司、鈴木重彦、関谷 誠、高田光政、原 真らの各氏である。名前を聞くだけで納得できよう。

この内、関谷 誠氏は、私の支部入会前に交通事故で亡くなっているので存じ上げないが、後の人は皆、私もしっかりお付き合いさせてもらっている。

余談であるが、温厚篤実な筆者までも、いつしか彼等に取り込まれ、一端の過激派になっていたのである。その証拠に、第20代JACの会長の大家博美さんがご健在中、筆者がお会いする度に「東海支部の暴れん坊、元気か」と冷やかされる始末であった。

そんな連中の中であって、石原さんだけが

沈着で冷静であった。どちらかといえば、物静かで温厚な人柄であった。その石原さん2代目の支部長で、うるさい連中をまとめながらの支部運営には、さぞや腐心されたことであろう。新参者の私にもそのご苦労の様子が傍から見ても窺えた。

ところが、この石原さんに突然支部との別れの時がやってくる。その訳は、ご尊父が若くして急逝されたからである。実家は、福岡の直方で化粧品や雑貨の製造販売業を手広く営んでいて、石原さんは後継ぎだったのである。

いずれは、実家に戻るようになっていたのだが、こんなに早くその時期がやってこようとは、石原さんにとっても想定外であった筈である。支部としても痛かったが、石原さんとしても後ろ髪を引かれる思いの東海支部との別離であったであろう。

石原さんの退いた後は、中世古隆司さん、沖 允人さん、原 真さんらが中心となって支部運営に当たった。ちなみに湯浅道男さんと筆者は、まだ新参者の支部員で、活躍の場は、もう少し後になる。

この石原さん、福岡に戻られても東海支部を離れた訳ではない。お亡くなりになるまで支部員として、支部の主要な行事には、必ず出席され支部運営へのアドバイスなどの他、何くれと無くお気遣いいただいていた。支部主催の懇親会の席上に福岡の銘酒“黒田武士”がいつも並んでいることをご記憶の方も多いと思う。石原さんの差し入れである。

本年6月の東海支部60周年の記念集会にも参加のご意向だったが、高齢ということで、コロナウイルス感染を心配され、急遽取り止められている。

あれからたった半年余りでの訃報である。それが判っていれば、無理矢理にでもご参加を要請したものを。今となっては、実に残念で仕方がならない。きっと石原さんも黄泉の国でそれを悔いておられるに違いないと思っている。今は、只、石原さんの霊安らかなれを祈るのみである。

ところで、この拙稿の中でナイロンザイル事件に触れたが、“石原國利、と聞いて、実は石原さんがこの事件の張本人であったと気付いた人は、何人いるだろうか。この事件を

モチーフとして井上 靖が小説「氷壁」を現しているが、この中の主人公魚津恭太のモデルこそ、石原國利さんその人なのである。

この小説「氷壁」は、朝日新聞の連載小説でスタート、さすがに井上 靖、小説だけに恋愛、不倫も交えた内容でたちまちミリオンセラーに。東海支部関係の各位には、是非この機会に小説「氷壁」読んでもらいたい。併せて石原さんを偲んでいただければ幸甚である。また、この小説を大映が映画化している。キャストは、山本富士子、菅原謙二、野添ひとみなど往年の大スターの顔が並ぶ。

※ナイロンザイル事件

石岡繁雄さん率いる「岩稜会」が、1955年の正月、前穂高東壁の登攀中に起こした滑落死亡遭難事故に起因する事件。トップの若山五郎さんがスリップ、セカンドの石原國利さんは、岩角にかかっていたナイロンザイルが何のショックもなく簡単に切れたことを報告。当時、ナイロンザイルは同じ太さなら麻ザイルの三倍の強度があるとうたわれていた。これに疑問を抱いた石岡さんがナイロンザイルの岩角への脆弱性を主張。この岩角欠陥を認めるようにメーカーに訴えたが、メーカー主催の公開実験では欠陥を明らかにできなかった。だが実験ではメーカーに作為的な行為があったことが後に判明、再度論争が起きる。最後は石岡さんの主張が正しかったことが認められ、事件は決着している。

略歴

1930年	福岡県直方市にて誕生
1948年	中央大入学と同時に岩稜会入会
1955年	1月2日前穂東壁にて遭難 (ナイロンザイル事件)
1960年	ビック・ホワイトピーク隊員
1961年	明神五峰赤壁冬期初登攀
1961年5月	東海支部設立 常務委員就任
1965年5月	東海支部長就任
1966年	アコンカグア南壁隊副隊長
1967年	父君の逝去により直方市帰省
2023年	1月29日逝去 享年94歳



体温調整幅を大きくするウェアー

装備委員会委員長 千葉 泰丈

ここ数年来、暑さや寒さに弱くなった。暑いには強いけど寒さに弱くなったとか、寒いには強いけど暑いのが苦手になったというのではない。両方ともに弱くなったことを感じる。これが歳を取ったという事なのだろうか。以前は夏の暑いときもエアコン無しで寝ても平気だったし、冬も今ほど厚い布団は必要なくて寝られたのだ。人より自分は強いのかなと自惚れるくらいであったのだが、今はからきし弱くなった自分を認めるしか無いのである。登山においてもしかり。冬の寒い時には重ね着をすれば良いのでまだ夏ほどの弱さを感じないのだが、夏の暑い時には少なくとも1枚は着ていなければならぬので、これ以上暑くなったら嫌だなと心配してしまうのである。

今一部の登山者は、シャツの下にベースレイヤーと呼ばれる薄いメッシュ状のアンダーを着ているようです。普通に考えるとさらに1枚着るのだから、シャツを1枚だけ着ているときよりも暑くないとおかしいはずなのだが、むしろ暑いという事を意識させない。そして汗が乾きやすいので、時間が経っても体を冷やしにくく体温低下による体調の悪化をあまり意識しなくて済む優れモノのアンダーです。生地がとても薄くて軽いので着ていることを忘れるくらいです。

以前、土曜日の朝のNHKの番組でゆる山へGOというコーナーで、そこに出演する若い女性アナウンサーが登山する時に着るゴアテックスの雨具をお世話させてもらったことが有ります。放送された番組を見たらその女性アナウンサーは登山中そのゴアテックスの雨具の上着を着続けて行動していました。お世話した商品を番組の中で着て貰ったことを有難いと思うと同時に、着こなしもとても良かったのでうれしい限りでした。ただ、比較的暖かい季節で良い天気であったにもかかわらずゴアテックスの雨具を着続け、普通は雨具を着る必要ないのでなぜ？との思いが生まれました。映像映えを狙っただけなのか？それとも私にはわからないほかのことを狙ってのことなのか。登山を良く知っている立場から見るとこの時の登山では雨具なんかは着る必要が無いばかりか、



むしろ雨具を着て行動しているとさすがのゴアテックスといえどもどうしても暑くてムレ感を感じて不快ではなかったのだろうかと思ってしまうので、良い映像にするために登山素人のアナウンサーさんも大変なのだなど。暑いはずなのに暑い表情を見せないように頑張っているのでは？と思いましたね。でもその表情には無理がありません。快適そうに楽しく歩いているのが見て取れました。逆に登山は専門を意識している私の方が間違っているのでは？と自問自答していました。ベテランと思っている自分が素人の方に教えられることもあるのではないかと。

この番組の登山は暖かい季節の低い山の登山でしたので、たくさんの荷物やウェアーは必要ありません。それが、どんどん標高を上げていくロングな登山では、変わっていく状況に合わせたレイヤリングが必要になります。低い所では暑いと思っていたのが、寒くなるのに応じてどんどん着込んでいかなければならない。または天候とかの変化にも対応できなければなりません。そのためにどうしても着るものの点数が多くなります。荷物を少なくするために、着るものを持っていく点数を少なく出来ないかと考えますね。同じレイヤリングで状況が変わっても暑くもなく寒くもないウェアーは無いものだろうか？

2～3年前頃、ノースフェイス社からゴアテックスに代わる新しい雨具の素材が発表されました。ゴアテックスから順次その素材に切り替えるようです。ゴアテックスのように防水で、

そしてさらに通気性が良くなって雨が降っていない時に着て行動しても快適だとの触れ込みです。暑い時も着て行動できて、寒くなったり雨や雨が降った時にいちいち着こんだり

する手間が省けるかもしれない。そう思っていたが、値段が高くてその手を引っ込めてしまった。そしてその性能は期待通りなものなのだろうか。

TOPICS

「播隆上人の顕彰碑を訪ねる」

支部の皆さん、支部員の有志の厚志によって建てられた播隆上人の顕彰碑が、伊吹山の山麓にあるのをご存知だろうか。揖斐川町のさざれ石公園を少し上ったところの、車が数台駐車できる程の広場の一角にある。平成14年11月、支部員である稲葉省吾さん(平成16年逝去)の発案で建てられている。

昨秋の10月2日、ボランティア委員会の懇親山行で、伊吹山の北尾根に連なる国見岳に登山した帰路に訪れた。最近、訪れる人もいないのか、辺り一面雑草で覆われていた。まずは、持参の鎌で草刈りである。



一汗掻くと大理石の立派な碑(写真)が現れる。表には、碑の建立の来歴。裏側には、有志の支部員の氏名が刻んである。碑の隣には、小さな祠があって、中に播隆上人ゆかりの阿弥陀像が祀ってある。碑の建立場所の選定は、この阿弥陀像の存在が由来である。

我々山を志す者にとっては、播隆上人は、薬師岳の再興、槍ヶ岳の開山など、偉大な先駆者として崇めなくてはならない。以前、先述の稲葉さんの手によって「伊吹山播隆祭」が毎年盛大に挙行されていたが、稲葉さんの後を継ぐ者がおらず、以後沙汰止みになっている。

この方面に行かれた方は、是非この顕彰碑を訪ねて先人を称えてもらいたい。また、併せて、稲葉さんの意志を継いで「伊吹山播隆祭」の復活を強く願うものである。(N. O.)

60周年記念事業として「東海山岳12号」を発行します。

書籍とCDがあります。
価格はどちらも3000円
+消費税です。

購入を希望される方は、支部
刊行物編纂委員会の委員に
申し込みをお願いします。

メールでのお問い合わせは

khoshi@katch.ne.jp

星 一男までご連絡ください。



山書蒐集夜話（その4）

支部員 安藤 忠夫

幻の山の本

- 『登臨行』A版のこと -

表題では「幻の山の本」としたが、せいぜい山の稀覯本といった程度である。

端的に記せば、藤木九三著、足立源一郎画になる『登臨行』A版のことである。二分冊になっていて、限定数30部、昭和15年12月に刊行され、頒価30円だったもの。本書は他に、普及本（B版）300部があって、こちらは当時10円で頒布された。

一時期、本書が山岳書の中で、最高位にあった、と云う話である。それも、作為に満ちた、仕掛けがあった。

一般に、古典籍はともかく、文学書や趣味本の世界であっても、けっこう高価で取引されていることは知る人ぞ知るのだが、その点、幸か不幸か山の本に関心を示す人は圧倒的に少なく、まだ大したことは無いと云われている。事実、一般趣味本と比べて一桁も二桁も違っているような気がする。それでも、私を持ち合わせている物差しからすれば、驚愕の思いで観ていることが時々おきる。

では山岳書の実態はどのようなものなのか。ただ、山書の蒐集を趣味とされている方の中で、「本の価格のことを言うのはよそう。下品である」と記された事があって、あからさまに価格に触れるのを、さげすむ向きもある。それも真実だろう。だから、あまりこの辺りのことに触れたくはないが、価格を曖昧にすると理解を得られないと思われるので、ここでは具体的に記してみる。

ご存じの方もあはずだが、東京で年1回「明治古典会七夕大入札会」と云う古書市がある。個人が入手を希望する時は業者を介して参加することになる。その入札会に、平成9年（1997年）夏、『登臨行』A版（記番11番）が出品された。

さる地方都市在住の蒐集家が応じられ、依頼



藤木九三著、足立源一郎画『登臨行』A版

者の意を受けて争ったのが、東京・玉英堂と森井書店だった。玉英堂が勝った。その蒐集家がこの時支払われたお金は、落札価格325万5600円、10%の手数料と消費税を含めて374万円余であった（当日用意されていた入れ札は、外に下から275万5600円、305万5600円、355万5600円）。私はご本人に直接お聞きしてもいるから、間違っていない。これが、過去、山の本で動いた最高額である。

じつは、それより少し前にも、同じようなことがあった。同じく本書『登臨行』A版（記番1番本）で、その時は、悠久堂と小林書店で競った。勝者は悠久堂だった。山の本屋の老舗である。依頼者は、京都のさる山の本の蔵書家だった。金額は正確には分かっていないが、先に記したものより幾分低かったようだがそれほどずれてはいない。入手直後のある席で、「ずいぶん高い買い物をしちゃったよ」と、ご本人が呟いておられた。

話はこれだけのことなのだが、すでに時代が移り、山の本に群がる年代層も価値観もかわった。書籍を取り巻く環境はすっかり様変わりしている。恐らく今後、本書を超える価格で取引される山書は現れないだろう。

ついでに、触れておくと、先に記した京都のさる山の本の蔵書家について、既にお気付だと思いが、この方の蔵書は、一括信州大学「山岳

研究所」に寄贈された。ただ、いつの席だったか、この寄贈について、冗談まじりに「後悔しています」と、話されていたことを思い出すのである。蒐書者の、偽らざる心理、心境なのだろう。

大学に寄贈された約8000冊をご覧になられた方も多いのではないだろうか。めったに書影を目にすることのない、豪華な限定本・稀覯本が所狭しと並んでいて圧巻である。だが本書『登臨行』の普及本はあるがA版はない。寄贈の直前、さる別の方、前記の市で争った相手方に人知れず譲られているからである。

なお、本書は、大町山岳博物館併設の図書館にも当然ながら、A版もB版も蔵されていない。

ここまで記したところで、本論に入る。

そもそも、山岳書、とりわけ山の稀覯本は、当時どの程度の値段で流通していたかである。確かな資料がないので具体的数字を示すことはできないが、その頃、ある山の本屋が「一千万円」と題するエッセイを書いている。その中で『氷河と萬年雪の山』特刷50部本、『書斎の岳人』100部本、『一登山家の思ひ出』70部本をはじめ、本書をふくむ主だった稀覯本14点をあげて、これで買えるかどうか、と記している。多分、値下がりした今でも買えないだろう。値段もさることながら一同に揃えられないのだから！ともかくも、そんなことから当時の相場を推し量っていただきたい。

じつは、初めに記した地方都市在住の方が購入に走った本は、つい最近までご自身が蔵していたもので、戦後間もない昭和21年に、名古屋の繁華街、大須の露天商の棚に並べてあったものを偶然見付け、入手された本だった。

ところが、あろうことか、言葉は悪いが東京の山書仲間に、意に反して、召し上げられてしまった。だから入札に参加する以上、負けることは許されなかったのである。多分、状況によっては、さらに積み増しをしても構わないと覚悟されていたのではなかったか。当時、本書は、正に幻の山書の位置にあった。

人手に渡った経緯について、よくは判らない。ご本人は、既に冥界の地に旅立たれてしまって



小島烏水著『書斎の岳人』100部本

いる。が、はじめの頃は「東京の方で当分の間、預かせてほしい、と言われて置いてきた」とのことだった。私の知る限りでは、その時、東京見物の案内とホテルの世話をしてもらわれた。さらに後になって、足立源一郎の4号ほどの油彩画を受け取られたはずである。大筋間違っていない。

私はこの頃、ときどき状況をご本人から直接聞きおよんでいて、「早く返してもらわないと、取りあげられてしまうヨ」と、事あるごとに忠告していた。じつは、私たち若い者が、無責任きわまりないヤジウマ根性で指摘したことが、本当になってしまっただけで残念でならなかった。本は処分する時以外「書斎」から出してはならないと肝に銘じたい。

事のはじまりは、小林静生著『山の本屋の日記』（昭和63年6月、鹿鳴荘刊）所収の「夢」「夢・その後」の記述である。もともとこれは日本山書の会の月報に寄せられたもの。

要約すれば、20年近くも東京で山の本屋の専門店をしても、『一登山家の思ひ出』愛蔵版、『エヴェレスト登攀』和紙刷り非売20部本、などの世に云うところの山の稀覯本は時々見掛けても、『登臨行』A版だけは一度も見ることがない。この商売をしているうちにどうしても手にしてみたい限定本だ、と云うものである。

この記述を目にされたのが、先に述べたさる地方都市在住の方で、当時、私も、若造ながらそれなりに親しくさせていただいていた一人だった。

その、預けたつもりの本が売りに出たしまっ

たのだから、何が何でも買い戻さねばならなくなってしまった。当時、「何で、自分の本を高い金を出して買わねばならないのか」と、腹立ち紛れに、話されていたことを覚えている。

この少し前のこと、私たちの仲間で、『山書好日』（1995年7月刊）と云う本を上梓することになった。ところが、件の『登臨行』A版の、初めの（戦後直後の）入手のくだりはあっても、現物がない。で、先に記した京都の方へ、入手されたばかりの本の撮影をお願いし、写真をいただいた。いま思えば、失礼極まりない、若気の至りであった。『山書好日』の巻頭に載せた『登臨行』A版の書影がそれである。

さらに時移って、平成21年（2009年）、東京・森井書店の目録に、本書『登臨行』A版（第13番本）の上下が150万円、平成22年（2010年）には第6番本が、120万円とされて載った。一瞬その書影を見て、著名な限定本蒐集家の高橋啓介さんが所蔵されていたものではないかと思いかけたが、よくは判らない。『山の限定本蒐書三昧』（1981年6月、湯川書房刊）の著者・高橋さんも、本書は、探求35年目にしてようやく手にしたという強者である。

結局、ここで登場した『登臨行』A版は、都合4冊ないし5冊と云うことになる。やがて更にごくどこかから、6冊目、7冊目が出現するだろう。決して世に云うほどの、幻の山書ではなかったのである。状況は違うが、奇しくも北村透谷の『楚囚之詩』出現当時のドラマを再現（註）させるようなものであった。

古書の移動には幾つものドラマがある。その、それぞれに辿った径を経て、現在の住み処を得たことになる。各々数奇な運命の道を経てきた果てである。なんだか、あの、「…… 沙羅雙樹の花の色 盛者必衰のことわりをあらはす おごれる人も久しからず 只春の夜の夢のごとし たけき者も遂にはほろびぬ ……」のくだりを思い起こしてしまう。

最後に本書の概要に触れておく。



畦地梅太郎著『よろこびの頂』

左・限定100部本、右・限定15部本

『登臨行』上・下巻 A版 藤木九三著、
絵・足立源一郎、昭和15年12月28日、相模書房刊、
四六倍判、上巻98頁・下巻99頁+2頁、総布装
上製本、本文和紙、2冊あわせて夫婦函入り、
限定30部、上巻・署名識語、下巻・オリジナル
彩色画一葉、頒価30円。

（註）詳しくは、小林義正著『山と書物』の「稀
数本、透谷『楚囚之詩』について」、および八
木福次郎著『古本屋の手帖』の「奇蹟の出現『楚
囚之詩』」を参照されたい。

『よろこびの頂』家蔵限定15部本のこと

2001年11月、東大正門前の書店から『森井書店
古書目録 No.25』が送られてきた。その中に
次のような山書が載っていた。

『よろこびの頂』 28万円

畦地梅太郎署名入、家蔵本限定15部、柄折久
美子ルリニール製本、天金、函付、表紙木版画、
貼付肉筆画1葉、本文木版画2葉・サイン入

画文集『よろこびの頂』は畦地梅太郎の著書
で、1984年4月に鹿鳴荘が刊行した。19×23・5
センチ、173頁、定価4800円だった。ほかに、同じ
年の10月にも限定180部本が2万5000円で発売
されたから、私は、普及本、限定本ともに購入
した。著者独特の情感あふれる文章と、ひと味
もふた味もコクのある画は相変わらずのも
ので、すっかり魅せられてしまった。限定本に
いたっては、濃紺色の麻布装で、表紙にはタイ
トルを兼ねたオリジナル版画が貼られ、本文中に

も2葉の木版画が配されていて、贅を尽くした重厚な装丁となっている。製本は三水舎とあるから、町田邦雄さんが担当されたものだろうか。

話は前後するが、私は、製本教室で2年間にわたって講義をうけた。それ以前も自己流ながらめげることなく製本を繰り返してきた。が、いっこうに上達できずにいる。冗談めかして、しかしながら半分は本気で、「定年になったらヨーロッパに留学する。製本のためだ」と、仲間にもふれ回っていたこともある。

手元に教材用として、大家利夫、徳住恒市、町田邦雄、安藤栄吉、伊藤 篤、板倉厚子などなどの、この道のプロの諸氏が手がけた山書がある。作業に疲れきったり、行き詰まったりするたびに、これらの作品を眺めることで、明日のエネルギーを得ることにしている。だが「画竜点睛を欠く」とまではいかないが、大事な作品が欠けている。リニューアル製本ではわが国の第一人者といわれる栃折久美子氏のものだ。栃折さんには『モロッコ革の本』『製本工房から』『手製本を楽しむ』などの著書も多数ある。

リニューアルとは、フランス語で思いのままの本に仕立てることだが、うわさによれば栃折さんの製本ともなると30万円を下らないらしい。事実、製本教室卒業時に、わが先生・板倉厚子さんに教材用として依頼したものは、材料代を除いて9万円を支払った。それでも相当値打ちのようだから、あながち見当外れではないだろう。

目録の本は栃折さんの装丁だ！重複しようとも著名な山の本である。そのうえ自宅の階段に架けている「白馬大雪渓」と題する畦地さんのサムホールサイズの版画は、何年前かに3万6000円でも購入した。だったら都合3葉の木版画とオリジナル画一葉とが挿入されているのだから値打ちではないかと、入手に動いてみる

ことにした。

これからも製本を続けるためには、ここは奮起一番、少々無理をしても購入しておかねばならないと決めた。購入をきめたからには、獲物を逃すわけにはいかない。

山の本の専門店のご主人は、私のことをいくらご存知であっても、そこは商売。客への対応は公平のはずで、競争相手があるとも限らない。悠長に構えていたのでは、目的の本に辿り着けないおそれがある。考えられるあらゆる手段、奥の手を試みることにした。

その日の夜、森井書店の奥さんの山仲間である知人に電話をし、「製本の教材にしたいから、どうしても入手したい。ご主人に伝えておいてほしい」と、奥さんに頼んでもらうようにした。たまたま書店の奥さんとは、私も2、3度、山登りを一緒したことがあり、そんなツテを放っておくテはないのである。

「将を射んと欲すればまず馬を射よ」の諺を地で行くようなものだ。翌早朝には、森井書店にフアックスで正式に注文を入れておいた。これで私の手に陥るのは間違いないだろうと思いつつ、いつものように職場に向かった。

その日遅く、自宅に帰ってビックリ。はやくも宅急便でくだんの山書が届いていた。消費税込み29万4000円の急な出費が生じたことに、いくらか面食らいながらも、うれしい成り行きだった。

届いた『よろこびの頂』は、記番4号、黄土色の総麻布装で、表紙には版画が貼られ、裏表紙は濃茶の縦縞が大胆に織り込まれている。挿入されているオリジナル版画などもみごとな出来映えのものだった。そして、裏表紙側遊び紙には、TOCHIORI ATELIER DE RELIUREと記した5割四方の小紙が貼付されていて、出自が明らかになっていることも自慢なところである。



東海支部の蔵書からの一冊③⑤

図書委員長 石田 文男

『日本の山の名著』・総解説

近藤信行・責任編集

〈その草創期にあつて、未知の大自然をもとめて深山幽谷に分け入った人々の表現には、発見と感動がこもっている。山に接したとき

のおどろきはと陶酔から生れたのは、美であり、力であり、生命であった。

日本の近代化があらゆる面で急速な発展をもたらしたとすると、山は人間に芸術的感性をうえつけ、自然科学の解明にいとぐちを

あたえたといえるだろう。伝統的な旅ごとと美意識のうえに、山はあらたな視点からとらえられ、日本人の生活のなかに生きはじめた。そこに近代の登山があった、

山登りには肉体的な充足とともに精神的な悦楽がある。文学・芸術や自然科学への興味がくわわって、山には独自の香気がかもしだされてきた。そして、すぐれた登山者は自身の体験と研究をもとに内面のドラマを描いてきた。古い山の書物を読むことは、松方三郎のいうように懐古趣味ではなく、新しい登山の基盤をつくるために必要なことなのである。「1章、近代登山のあけぼの」のはじめからの引用。首を縦に振る一文だ。

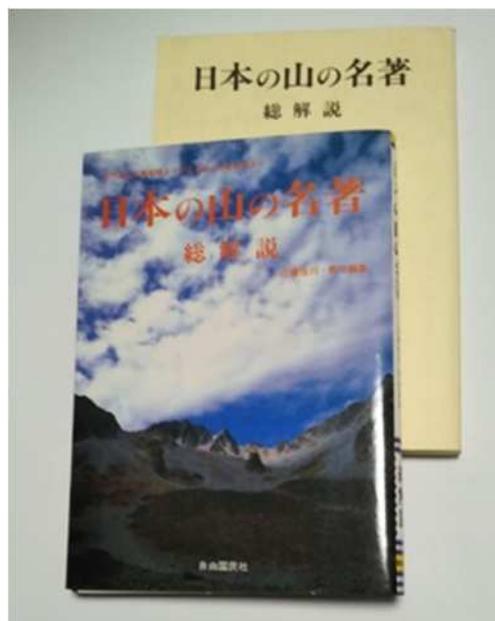
ここにあげられている中には古典的で取付きにくい感のするところもある。が、決してそうではない。一つ一つ一読してみれば何か感ずるものがあるのでは。

さて、この著は大きく4つの章で構成されていて、概略を掻い摘んでみる。

「1章、近代登山のあけぼの」、ここには『松浦武四郎紀行集』、『日本アルプス-登山と探検』、『山の憶い出』・・・など29著並んでいる。そのいずれもが不朽にあってのちの登山者の意義に燦然とあり続けている。

「2章、山に憑かれた人々」、〈西欧の登山技術が導入されて、日本の登山界はあらたな段階にはいる。・・・ヴァリエーション・ルートの開拓がつつぎと繰り広げられ・・・。わが国に近代登山の精神が芽生えてから、日本人はわずかな時間のなかで、あらたな登山文化をきずいたといえるだろう。大正中期から昭和前期に刊行された本、そしてそこに活躍した人々の著作には、つねに未知の登高をもとめるエネルギーがあり、日本の山の独自性を再認識する動きがみられる。山の本は日本文化の一角に厳然と存在を主張しはじめている〉。『山行』、『登山の文化史』、『山の絵本』・・・など49著。

「3章、戦後の山の本」、〈登山は世界的動向のなかであらたな展開をしめし、大衆の健全なスポーツとして完全に開化したといえるだろう。山はそれぞれの人生のなかに生き続け、と同時に登山者の社会的役割が問われるようになった。それは、いかにして山々の美



しさを守るか、人間が自然の恵みをいかに享受してゆくかの意味を考えることにつながり、山と自然にたいする総合的な把握が必要となる。『マナスル登頂記』、『日本百名山』、『山のパンセ』・・・など30著。

「4章、その他」〔山の文学〕、〔山の芸術〕、〔山の民族・宗教〕、〔山の自然科学〕・・・〔登山技術入門書〕、〔遭難記録〕など10分野。そのどれにも必見の一冊が有る。

次に「大要」では、その著作の端的な概説文から、それぞれの紹介者個人の山への姿勢・本への想いをうかがいしることができる。また、「解題」には著者の略歴が述べられていて興味深い。生年・環境・登山歴・著作などを正しく知ることができる。周辺の人との繋がりも知ることができるのは有意義だ。

ぱらぱら頁を繰っていると、どの一冊にも目にとまり食指が動く。

ここに、数冊の中から抜粋してみたい。

①『山の絵本』(尾崎喜八著)：〈詩人でなければ書けない文章・・・、たてしなの歌、念場が原・野辺山ノ原など二十六篇のエッセイ。いわゆる紀行文や山水叙景ではない。著者によれば「詩で書いたことをもっと自由に、こまかく、具体的に、散文の形で書いてみたい・・・その中で詩と科学とが共に奏でて歌を成している文章、そこに生きることの喜びが実例によって勸奨されているような文学——

日本でこれが最初の詩精神につらぬかれた生活と自然愛との協奏曲のような文学」ということになる)。この協奏曲のような文学に、いかに多くの登山者が感化されたことであらうか。

② 『山のパンセ』(串田孫一) : 〈なんとしゃれた書名であることか。・・・「パンセはフランス語で、想い、思索、瞑想、感想などという意味があり、また三色堇のこともパンセという〉(収録されている文章の表題「雪のある谷間」「山のソナチネ」「夏草の匂う日」・・・。そのどれもが、たしかに感性と知性とをうかがわせ、とても山の本とは思えない表題ばかりではないか。)〈文学的香りと、質の高い文章と思索は、山の世界に清新な空気を吹き込み、一つの全く新しい分野をつくり出した。ここにとりあげた二著(『若き日の山』)とも、文学として存在し続けることのできる数少ない山の本である。〉私もかつては幾度となく読み返したことだろう。

③ 『山・人・本』(島田巽) ; 〈本書は山を通して人と書物を語り、また書物を通して人と山を語った稀有の書である。山の書物に親しむことも山登りの一つの側面であることを思うと、本書はまさにアルプスの嶺から湧出する清冽な流れのように、読者の心をしっかりと潤してくれる好個の書とってよい)。〈山の仲間には、山の文献を大切にする気風がある・・・。山と人と本との付き合いは、私にとって大きな心の支えなってくれた。本書はまた読者に山と人と本との付き合いの意義をあらためて認識させてくれるであろう)。いつも、こうありがたいものである。

ここにとり挙げられている中の多くはかつて「日本山岳名著全集」,「復刻・日本の山岳名著」に選ばれた所以でもある。

因みに、支部の蔵書としては名著全集中3冊、復刻は全巻揃っている。

A5判 232頁 発行：1985年2月25日
発行所：自由国民社

東海支部メルマガ登録のお願い

東海支部ではメルマガ「東海支部だより」を毎月1回発信して支部からの連絡、行事の案内や各委員会からのお知らせなどを支部員・支部友会員の皆さんに配信しています。また急ぎの連絡を臨時発信することもあります。

このメルマガは登録した希望者に配信されます。**ぜひ登録してください。**

登録は東海支部のホームページの右側メニュー「支部メルマガ読者登録」で簡単にできます。登録が出来ない場合は総務にご相談ください。

登録ページ URL :

<http://jactokai.sakura.ne.jp/shibuhp/modules/pico02/index.php/content0004.html>



東海支部から
のお知らせ
で～す。



回想の登頂記 ⑤ アコンカグア

支部員 杉浦吉治

“「Don't sleep! Mr.Sugiura!” 2005年1月6日午後3時15分、南米大陸最高峰アコンカグア(6,959m)の頂上に辿り着いたとき、現地ガイド・ヘラルドさんの声だ。

AC(C3)へ帰着してから思い出した。あの時のヘラルドさんの言葉は、プッチーニのオペラ「トゥーランドット」のアリアのタイトル《Nessun Dorma(誰も眠ってはならない)》に似ていたな、と。死ぬ思いでACまで帰着したのに、何故かこんなことを思い出した?!



アコンカグア頂上にて

<アコンカグア登山の動機>

2003年にエルブルース登頂後、次はどの山に登ろうか、と考えていたところ、その年の3月に古書店で見つけた当東海支部編『環太平洋一周環境調査登山の記録』の「Aconcagua(6,959m)登頂記」(篠崎純一氏執筆)を読んで、どうしても登りたくなった。幸い、アトラストレック社のアコンカグア登山募集があったので夫婦で申し込んだ。

<冬季富士山で雪上耐風訓練>

アコンカグアは、高度もさることながら、チボル・セケリの『アコンカグア山頂の嵐』(栗栖継・栗栖茜訳、ちくま文庫)を読み、山頂付近は「白い嵐」という強風が吹き荒れているため、低温下の強風に耐えるための訓練(実はテスト)が必要だ。登頂成功率は約50%ということである。不成功の原因は、高度順化の失敗と強風による滑落が半々ということだ。

そこで、出発前の12月に富士山7、8合目での雪上耐風訓練に参加した。富士山には何度も登ったが、この季節の登山は初めてである。寒さと風の強さは想像以上であった。だが、家内ともどもなんとかこのテストにパスして、アコンカグア登山に参加できることになった。

この訓練では五合目の佐藤小屋でお世話になったが、ここで当東海支部の大先輩である『果てしなき山行』の著者尾崎隆氏に偶然出会った。ところが、残念ながらこの出会いが最初で最後となった(2011年5月、エベレスト南東稜で遭難)。

<チリのエル・プロモで高所順応登山>

12月21日、成田からダラス経由でチリのサンチャゴへ向けて出発。翌22日のサンチャゴはXmasムードでいっぱいだ。南半球のXmasツリーに雪はなかった。

23~28日 高所順応のため5,430mのエル・プロモ登山へ。T/Lは早川敦さん(明大山岳部0B炉辺会会員、アンナプルナI峰登頂者)。現地ガイドのリーダーは逞しいヘラルド君、サブは心優しく美人のビヘイニアさん、そしてキッチン・ボーイは日本語独学中のギド君。ピエドラ・ヌナメラード(3,100m)を経て、4,200mのエル・プロモBCへ。27日早い朝食を済ませ、エル・プロモ向けて出発。13:57頂上に立った。300度の素晴らしい眺めだ。ここから、目指すアコンカグアの南面が遠望できた。28日、サンチャゴへ帰着。

<アルゼンチンのメンドーサへ>

29日 チリ国際空港からアルゼンチンのメンドーサへ。僅か45分のフライトでメンドーサ着。

登山許可を得るために州政府観光局サブセンター(国立公園管理事務所)へ直行。登山許可申込書にはスペイン語と英語が併記してある。登山の有効期間は20日間、登山許可料は300US\$。必要事項を記入し、パスポートと現金を提出すると意外にも素早く登山許可証を手にすることができた。

ここでアコンカグアの10万分の1地図を購入、8US\$。これは、周辺の山々の山名はよく記載されているが、アコンカグア本体の詳細がやや不満。

ここから専用車で出発。映画“Seven Years in Tibet”のロケ地ウスパジャータで小休止後、宿泊地ロス・ペテンテス(2,580m)のロッジ着。

＜アコンカグアBCへのキャラバン＞

30日 7:00の朝食を済ませ、8:13出発。途中、アコンカグアの南壁を目にすると気持ちが昂る。



BCのプラサ・デ・ムーラス

8:35、オルコネス谷の入口(2,900m)へ到着。ここからミューラ(ラバ)に乗って9:10、BCのプラサ・デ・ムーラス(4,230m)へ向けて出発。実は、私も家内も今まで馬にもラバにも乗った経験はない。ミューラは実に賢く、乗った人間が素人だと判断すると気ままに歩き出す。途中、水の流れがあると遠慮なくサボってそれを飲み始める。また、その遅れを取り戻すわけでもないだろうが、今度は勝手に走り出す。乗る前は高い目線で写真が撮れると思い、カメラを首からぶら下げていたが、それどころではない。振り落とされないように必死に手綱をつかむ。

10:30コンフルエンシア(3,368m)で小休止。徒歩では4時間のところ、ミューラで1時間20分。

さらに進むと、カテドラル(5,254m)とクエルノ(5,400m)が迫る。13:00昼食、小休止。

アコンカグア西面が見える急斜面にかかると、ミューラも休み休み喘ぎあえぎながら登る。それでも、15:24、BCプラサ・デ・ムーラスへ到着。休憩を含めて何と6時間14分の乗馬だ。初めての乗馬は緊張の連続、徒歩より時間は稼

げたが疲労は多大だ。

ここで、キャンプ・サイトへの出入りをチェックするレンジャー・ステーションへ登山許可証を提出する。入念にチェックの後、C1以上の滞在期間に応じた日数分の汚物処理用のポリ袋を手渡される。個人差はあるにしても、内容物の量が少ないと帰りに罰金を科せられるという。因みに、BCでは立派なトイレ小屋があるから安心だ。

急いでテントを張りひと休止。テントサイトを見渡すと、東側のアコンカグア登り口付近は、ペニテンテス(氷塔群)という珍しい光景。キリマンジャロで見たそれとはスケールが違う。南側左からトロサ(5,300m)、メキシコ(5,000m)と続く。

31日 早朝からよい天気だ。今日は、朝食を8:00に済ませて、高所順応のため9:11にC1のキャンプ・カナダ(4,800m)へ出発。BC東側のペニテンテスを抜けて12:22、C1着。軽い昼食と小休止後12:40発、13:55にBCへ帰着。キャンプ・サイトから南西約800mのホテル・レフヒオまで散策。ここで、アコンカグア5万分の1地図を購入。やはり、メンドーサで購入した10万分の1のとは違い、アコンカグアがより詳細だ。

テントへ戻ると、キッチン・スタッフが見事な「年越しケーキ」を作ってくれていた。夕食はトリのモモ肉焼きとシャンパン。こんな山奥で贅沢な夕食だ。



ペニテンテス(氷塔群)の中を通過してC1へ

食後20:40過ぎから、それまで鉛色だったアコンカグア西面が赤く染まりだした。急いで撮影に取り掛かる。今回の山行の目的は登頂のため、撮影機材はぐっと抑えて、作品用の6×6判カメラと三脚は持ってきていない。西面は次

第に不気味なほどの真っ赤な血色に染まった。6×4.5判、35mm判ボジとネガの3台のカメラを使って息を止めてシャッターを切る。1回切ると共に深呼吸をしないとこの高所では倒れてしまう。光量がだんだん落ちてきたので、近くの大きな岩に両肘を付けゆっくりとシャッターを切る。何十枚撮ったか、帰ってからのお楽しみだ。



真っ赤に染まったアコンカグア西面

1月1日 2005年元旦のすばらしい夜明け。南から西に順にトロサ、メキシコ、威容を誇るデドス(「指」の意4,974m)、続いて前カテドラル(4,900m)、カテドラル(5,254m)、5,100mの何故か無名峰、クエルノ、ロス・オルコネス(5,383m)の峰々が朝光を浴びてすばらしいパノラマだ。

8:00の朝食後、10:00メディカル・チェックのためレンジャー・ステーションへ。何故か、2人を除いて全員アウト！そんなバカなことがあるか、日本を発つ前に厳格精密な健康診断を受けて全員オーケーとの結果参加したのに。再検診の結果、1人だけまたアウト！

1月2日 9:00再々度のメディカル・チェックの結果、やっとOKを得て10:40いよいよC1へ向けて出発。ペニテンテスを抜けて急斜面に取り掛かる。11:00頃、小休止。各自の登攀用具、食料を背負っての登高はこの高所ではかなりキツイ。12:30頃、2度目の休憩で昼食。

ここまで登るとクエルノが近くに感じる。また、カテドラルの上部もよく見えてくる。14:35、C1到着。C1からは1テント3名となる(加わった1名は、名大ワンゲル部OB)。テント前から雪を冠したチリのロス・レオネス(5,930m)が見える。

今日はここから高所順応のため、さらにC2

途中まで登る。C1を見下ろすところで僅かな流れから水の採取をする。C1帰着後、18:40狭いテントの中での夕食。眼前に迫るアコンカグア西面が次第に赤く染まってゆく。

1月3日 今日も晴天。10:08、C2(ニド・デ・コンドレス(「コンドルの巣」の意、5,365m)へ向けてC1を出発。空気が薄く苦しい登高。2度の小休止の後14:01、C2到着。すぐテント設営。15:00、高所順応のため、さらに50分ほど登る。

ロス・オルコネス、クエルノがよく見える。北東方面には暮れゆく5,000級の峰々が静寂の中で美しい。アコンカグア主峰の北西面が眩しく夕日を受けて凛々しく見える。21:04太陽は隣国チリの海へ沈んだ。

1月4日 10:15、高所順応のためC3(キャンプ・ベルリン、5,950m)の上部へ向け出発。13:09、ベルリン小屋(5,930m)到着。13:50、さらに上部へ。14:40、6,250mのホワイト・ロックスへ、ここから頂上まではあと700m少々だ。今日はここまで。6,000mを越えたのは初めてだ。16:01、C2帰着。17:30、早めの夕食を済ませ就寝。

1月5日 6:00起床。無風、静かな朝だ。C2サイトにはまだ日が当たらず登山者は夢の中か。11:02、C2出発。喘ぎながらの登高の末13:46、C3到着。すぐテント設営。飲料水をつくるため、きれいな残雪を探して採取。6,000m近くなると小さな動作でも息が切れる。明日は頂上アタックで出発が早いのに、20:00少し過ぎまで撮影に専念。

<頂上アタック>

1月6日 いよいよこの日が来た。クエルノ右奥の天空にアコンカグアの山影が映し出された。「影富士」ならぬ「影アコンカグア」を撮影。今日も無風だが寒い！気温-10℃。昂る気持ちを抑えて5:45、C3を出発。

7:45、出発2時間後に早くも2度目の休憩。思いっきり深呼吸をしても酸素が体に入らない。酸素を取り込まないと足が前へ出ない。

7:54、出発して約3時間、6,400mのインディペンシア小屋に到達。猛烈に苦しい。ここから残雪をトラバースするためアイゼンを装着。14:00過ぎ、ノーマル・ルートの中で最悪の400mにもわたるグラン・カナレータ(急峻な岩溝)



黎明の「影アコンカグア」

を無事通過。しかし、6,800mの地点でスピードがかなり落ちたので、リーダーから荷物を減らすように命じられた。こっそりザックに収めてきたポジ・ネガ各2台のカメラのうち、何を間違えたのか頂上で撮影するつもりでポジ・フィルムを装填した1台を入れたままザックをデポして行くことになった。酸素が薄くなって判断力が鈍っていたのだ。



雪を纏った南峰の壁

もう一息という地点(6,900m)で、先行していた家内が待っていてくれたが、この先は2人とも倒れては他のメンバーに迷惑をかけるので、家内はここで待つ、という。私は意識が朦朧としながらも、15:15、6,959mの頂上へ到達して倒れた。ここで冒頭に記したように、現地ガイドのヘラルド君に「寝てはならぬ、この水を飲んで立ち上がれ」と言われ、水を飲んだら意識が戻った。頂上にはアルミニウムの十字架状の太いパイプが置いてあり、ステンレス製のボックスに登頂の証を入れるようになっている。しかし、何を入れたのか覚えていない。それでも記念写真を仲間に撮ってもらった後、雪を纏った美しい南峰(6,930m)の壁を始め、360度のパ

ノラマ写真を不本意ながらネガ・カメラに収めた。頂上には積雪はなく、標高に似合わない山頂だった。

15:30頃C3に向けて下降、膝に力が入らず踏ん張りがきかない。ヘトヘトになって20:08、C3へ帰着し、テントの中へ倒れ込んだ。家内が紅茶を沸かしてくれ、それを飲んだらやっと元気が出てきた。

1月7日 ゆっくり休養した後、BCに向けて下山。重いザックが肩に食い込む。しかし、C2を経由してから下るにしたがって呼吸は楽になり、パーティの仲間もみな元気が出てくる。15:18、無事BCへ帰着。19:00夕食はミートパイとピザ、ともに味よし。夕食後のBCサイトに静かな時間が流れる。21:00頃、アコンカグアの西壁が美しさを越えて不気味な血のような色に染まる。山頂付近は昨日の登頂時とすっかり様相が変わり、赤く染まった雲が嵐のように速いスピードで動いている。1日違いで我々はベストコンディションの日に登頂できた。まことにラッキーであった。

1月8日 9:00朝食、本日は1日休養日。風もなく快晴。昼食に、元日に失念していたモチがやっと出て正月気分を味わう。19:00夕食はアルゼンチンのお好み焼き、実にうまくビールによく合う。快晴の夕空に美しくアコンカグアの西壁が映える。

1月9日 8:00朝食。9:30、BCを出発。レンジャー・ステーションで汚物を提出、無事パスする。ここで、ヘラルド君とお別れ。帰途はムーラ(ラバ)を使わず、ロス・オルコネスまでの約10時間の道のりを徒歩で下山。何度かの渡渉を強いられるが、みな黙々とひたすら歩くのみ。

20:50、やっとプエンテ・デル・インカのレンジャー・センターへ帰着。何と、出発から11時間20分、よく歩いたものだ。ここからは専用車でペニテンテスのホテル・アイーレンへ。

<1月10日 復路>

ホテル・アイーレンから専用車でアルゼンチンとチリの国境を越えてサンチャゴへ、翌11日ダラス経由で13日成田へ無事帰国した。

委員会報告

【山行委員会】

2022年度 支部山行実施状況

日 程	日数	山 域	山 名 等	参加人数	リーダー	
4 月	9日	1日	養老山脈	多度山・美濃松山・石津御嶽	6人	稲葉真英
	9日	1日	各務原	伊木山	中止	伊藤祐幸
	23日	1日	南紀	姫越山	5人	石田伸郎
	25日	1日	鈴鹿山脈	鎌ヶ岳	5人	鈴木慎吾
5 月	8日	1日	若狭	大御影山・大日岳	6人	吉田俊紀
	12日	1日	鈴鹿山脈	竜ヶ岳	中止	鈴木慎吾
	14日	1日	養老山脈	石津御嶽・恋姫山・桜番所・草履屋	6人	稲葉真英
	14日	1日	各務原	伊木山	中止	伊藤祐幸
	28日	1日	田原	大山・雨乞山	中止	石田伸郎
6 月	29日	1日	鈴鹿山脈	釈迦ヶ岳西面・赤坂谷周回	5人	渡邊泰夫
	4日～5日	2日	中央アルプス	摺古木山・黒川右股遡行	8人	山田明美
	11日	1日	阿寺山系	小秀山	中止	鬼頭則俊
	11日	1日	各務原	伊木山	中止	伊藤祐幸
	12日	1日	鈴鹿山脈	元越谷沢遡行	4人	渡邊泰夫
	12日	1日	飯田	風越山・虚空蔵山	3人	石田伸郎
	14日	1日	愛鷹山塊	越前岳	中止	鈴木慎吾
	16日	1日	敦賀	鉢伏山	5人	鈴木慎吾
	18日	1日	多治見	深山～三国山～折平山	4人	大矢英詞
	18日～19日	2日	伊那山脈	陣馬形山	11人	稲葉真英
7 月	19日	1日	伊吹山系	伊吹山	3人	千葉泰丈
	9日	1日	各務原	伊木山	中止	伊藤祐幸
	16日～17日	2日	中央アルプス	木曾駒ヶ岳・宝剣岳・将棋頭山	中止	石田伸郎
	17日～18日	2日	白山山系	御前ヶ峰	中止	稲葉真英
	20日～21日	2日	八ヶ岳連峰	赤岳	5人	鈴木慎吾
8 月	31日	1日	鈴鹿山脈	愛知川遡行	6人	渡邊泰夫
	5日～7日	3日	南アルプス	小仙丈沢遡行	中止	山田明美
	11日	1日	鈴鹿山脈	センコウ谷～赤坂谷～ツメカリ谷遡行	4人	渡邊泰夫
	13日	1日	各務原	伊木山	中止	伊藤祐幸
	20日	1日	伊那山地	鬼面山	中止	石田伸郎
9 月	26日～28日	3日	奥秩父	大菩薩嶺・雲取山	7人	杉村正博
	3日～4日	2日	木曾水系	岩倉川遡行	5人	渡邊泰夫
	10日～11日	2日	中央アルプス	木曾駒ヶ岳～将棋頭山～茶臼山	4人	石田伸郎
	10日	1日	各務原	伊木山	4人	伊藤祐幸
	18日～19日	2日	鈴鹿山脈	谷尻谷～クラシ遡行	中止	渡邊泰夫
10 月	30日～10/2日	3日	北アルプス	横尾本谷～氷河公園天狗池～横尾	4人	山田明美
	8日	1日	各務原	伊木山	中止	伊藤祐幸
	13日	1日	愛鷹山塊	越前岳	中止	鈴木慎吾
	15日～16日	2日	中央アルプス	伊那前岳・宝剣岳・檜尾岳	4人	石田伸郎
	16日	1日	鈴鹿山脈	御在所岳	中止	稲葉真英
	22日～23日	2日	荒城川	木地屋溪谷	4人	渡邊泰夫
	22日～23日	2日	八ヶ岳連峰	編笠山～権現岳	中止	栗木洋明
	22日	1日	阿寺山系	小秀山	4人	鬼頭則俊
	26日	1日	福井一乗谷	一乗城山	5人	鈴木慎吾
	29日～30日	2日	諏訪	高ボッチ・鉢伏山	8人	稲葉真英
11 月	29日	1日	飛騨	島脇谷山・船山	中止	伊藤祐幸
	30日	1日	奥三河	鳳来寺北東尾根	6人	小林智佐
	5日	1日	春日井	道樹山・大谷山・弥勒山・池田富士	6人	池戸美恵
	5日	1日	湖北	賤ヶ岳～大平良山	4人	吉田俊紀
	12日	1日	養老山脈	草履屋・志津山・御当岳	中止	稲葉真英
	12日	1日	各務原	伊木山	4人	伊藤祐幸
	20日	1日	松阪	伊勢山上	中止	石田伸郎
	26日	1日	愛岐丘陵	鳩吹山	12人	鬼頭則俊
30日	1日	尾鷲市九鬼	頂山～オハイ海岸	7人	鈴木慎吾	

12月	3日	1日	養老山脈	養老山・小倉山・三方山	7人	稲葉真英
	3日	1日	鈴鹿山脈	鬼ヶ牙～白杵岳	6人	池戸美恵
	10日	1日	室生山地	古光山	5人	石田伸郎
	10日	1日	各務原	伊木山	6人	伊藤祐幸
1月	7日～8日	2日	富士五湖	三ツ峠山・竜ヶ岳	12人	栗木洋明
	14日	1日	各務原	伊木山	中止	伊藤祐幸
	21日	1日	余呉トレイル	椿井嶺	6人	伊藤祐幸
	24日	1日	高島トレイル	赤坂山	中止	鈴木慎吾
	28日	1日	田原アルプス	衣笠山・滝頭山・藤尾山・稲荷山	中止	石田伸郎
2月	28日～29日	2日	北アルプス	上高地	中止	稲葉真英
	4日	1日	高島トレイル	二の谷山	8人	伊藤祐幸
	11日	1日	各務原	伊木山	3人	伊藤祐幸
	11日～12日	2日	八ヶ岳連峰	本沢温泉～硫黄岳	中止	稲葉真英
	18日	1日	板取川上流	ゴンニャク	14人	石田文男
	19日	1日	松阪	伊勢山上	5人	石田伸郎
3月	26日	1日	飛騨	火山	6人	吉田俊紀
	4日	1日	銀嶺高原	霧訪山	6人	鬼頭則俊
	5日	1日	九頭竜川上流	岩穴谷山	中止	伊藤祐幸
	5日	1日	鈴鹿山脈	高室山	4人	千葉泰丈
	10日	1日	高山西	猪臥山	6人	鈴木慎吾
	11日	1日	各務原	伊木山	中止	伊藤祐幸
	11日～12日	2日	両白山地	大日ヶ岳	4人	稲葉真英
	28日	1日	恵那市岩村	三森山・水晶山	4人	鈴木慎吾
	延日数	98日			総人数	276人 (116人)
					平均人数	5.8人 (6.1人)
					実施率	62.3% (29.7%)

3月の山行については、実施予定で記載してある。

山行委員会委員長 稲葉 真英

【亀の会】

干支の山 兎走山 山行報告

亀の会では、毎年1月に干支の山に行くのが恒例です。今年は、近場の岐阜市の兎走山172mに行きました。1月26日の予定だったのですが、10年に一度の大寒波襲来により、2週間先延ばしにし、2月9日になりました。

今回の山行担当の加藤 怜さんは、年男。そして今回のメンバーの最高齢者でした。思いのほか急な勾配、急な階段がありましたが、「ゆっくり歩けば後期高齢者だって山歩きを楽しめる」と意を強くしました。

兎走山の山頂の見晴台からは、真っ白にお化粧した御嶽山、乗鞍岳、中央アルプスがくっきりと見えました。途中から見えた伊吹山や小津権現山も白く輝いて、冬の山の展望を楽しみました。

松岡照代さんの感想

電車で普段行く事のない所に出かけるのは楽しい。JR岐阜駅改札前に集合した。この駅に来たのは初めてだ。駅前に岐阜の市電が展示してあり窓一面に岐阜のカラフルな和傘が並んでいた。JAぎふ日野支店でバスを降りると野菜



御嶽山

の販売をしていた。大根100円、白菜小60円。思わず買いたくなったが重い荷物を持っては登れないと諦めた。登り口の右側に日野1号古墳があった。中をのぞくとけっこう奥が深い。屋根には平たい大きな岩が乗っていた。

いよいよ登山開始。いきなりきつい登りで上を見上げると真っ直ぐ道が続いている。ようやく平らな稜線に出ると左の眼下に長良川が見えた。展望の良い場所からは遠く名古屋の高層ビルが望めた。しばらく進んで行くと舟伏山の

頂上に着いた。よく見ていないと通り過ぎてしまいそうで舟伏山262mと言う黄色いプレートがあるので頂上とわかった。次の岩田山まで登り下りを繰り返し兎走山に向かう。途中鉄塔から左側を見ると右から雪のかぶった伊吹山、岐阜城、歩いてきた稜線が見られてちょっと感動した。兎走山はコースを変更して登った。最初から急な階段が続いた。

山頂では“兎走山とのやま172m 山頂で～すおつかれさま”の文字と可愛い兎の絵が迎えてくれた。少し下がった所で昼食。遠くに御嶽山と乗鞍が見え下に長良川と町並みが気持ち良かった。下りは石がごろごろして滑りやすく注意して降りた。春日神社に13時20分に到着。14時に岐阜駅で解散した。2月にしては暖かく景色も良く楽しい山行でした。

担当リーダーの加藤 怜さんの報告

冬の穏やかな日に恵まれた山行でした。舟伏山、岩田山は展望には恵まれません、冬枯れ

の木々の間からは近くの間山々が望めて飽きない歩きだったと思います。舟伏山の登りは割と急でしたが皆さんは小休止で山頂到着。岩田山では小腹を満たして下山。

兎走山はコースを変えて北から南へ縦走する事にしました。登りは巡視路のかなりの急登、足元はザレ気味の悪路でしたが皆さんは慎重に登り切り、健脚を感じました。

ユックリですが皆さんの慎重な行動で、冬の日を楽しく歩く事が出来ました。

尚、兎走山の読み方は(うそうやま)(とぼしり)など7種ほどある様ですが関市史には「うそやま」とルビが、下を通るトンネルは「とそうざんトンネル」と表記があります。

行程 岐阜駅～(バス)～バス停JAぎふ日野支店前9:20～舟伏山262m～岩田山270m～兎走山172m12:20～13:00～神池バス停12:33～岐阜駅

亀の会 加藤 守彦

【自然保護委員会】

自然保護委員会では花王よりの助成金50000円で、赤外線カメラ45500円、振込料770円、SDカード電池料1006円、残の1694円と委員会費の残5746円をプラスして7436円で本を購入した。

カメラは猿投の森の動物写真用として大いに役立つことと思う。今までの猿投の森での調査等で使用のカメラが、故障が多く不便であったので助かる。本も動物や植物の同定に役立つものである。

当委員会では、猿投の森の動植物の調査活動をしている。新しいカメラ等で来年も張り切った活動が期待できるものと思う。

委員長 井藤 恵美子



【東海学生山岳連盟】

令和4年度チーム冬山

今年度もチーム冬山としての活動を開始しました。メンバーのほとんどが冬山未経験ということもあり、学連OBの方から助言をもらいつつ手探りで活動しています。

2月10日～12日は、メンバーのうち4人で国立登山研修所の積雪期登山基礎講習会に参加してきました。初日は雪質や雪崩について机上講

習を受けたり、プランニングやリスクマネジメントについて学びました。2日目からは実際に山に登り、歩行技術や読図技術、雪山での生活技術などを丁寧に教えていただきました。初心者が多い私たちにとって良い経験になったと思います。

他にも各々が支部長やOBの方にアイスクライミングを教えていただいたり、野伏ヶ岳や伊

吹山に行ったりしていました。

現状の大きな課題は、メンバーをまとめ山に引張っていく存在がないことです。自分がそれをできればよかったです。私にはそれをやるだけの知識も技術も体力も気力もありませんでした。今シーズンの目標も不明確なまま進めてしまい、かつてのような山行はできていません。

委員長交代

およそ1年間、学連の委員長を務めてきました。歴代の委員長とくらべると力不足で、荷が重かったです。それでも学連を潰すわけにはいかないと思い驚馬に鞭打って頑張ったつもりです。

私が大学1年生の頃、いつか冬山にも行ってみたいという思いからチーム冬山のミーティングに参加させてもらいました。当初は話を聞くだけと思って参加したのですが、先輩方の導きによってあれよあれよという間に道具を揃えることになり、冬山を始めることになりました。背中を押してもらったことに感謝するとともに、後輩を導く存在としての学連のありがた



伊吹山にて

さを感じ、受け継いでいかなければならないと思いました。

しかし、私の力のなさから思うような学連運営とはいきませんでした。こんな未熟者をおかいかけてくれた東海支部の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。そして、次の委員長をよろしくお願いします。学連の未来を彼らに託します。今後も学生にお力添えくださいますようお願い申し上げます。ありがとうございました。丸岡 春香

会員の広場

同好会紹介コーナー

スケッチクラブ

福井 雅子

佐布里梅林一花より団子!

3月1日(水)、今年最初のスケッチは念願の知多市の佐布里梅林へ。ダウンジャケットが邪魔になる程の好天に恵まれました。

梅林が広く(25種類、約6,000本)どの場所を描こうか迷いました。紅梅・白梅・ピンク等色々な色を入れたいと思いましたが、なかなか良い所が見つかりません。池もいいなあと思いましたが梅が上手く入りません。時間だけが過ぎ、やはり花より団子かなあーと昼食を先に行いました。

描き始めると梅の花の形、色が難しいと思いました。そこに小鳥(多分メジロ)が飛んで来て慌てて描こうと思っても待ってくれません。悪戦苦闘でしたが、桜と違った落ち着いた梅の香の中での充実した時でした。

14時「梅の館」内の庭園テーブルで、今日の参加者5人が集り、観賞会と懇談会に移りました。対象・構図・色遣い—それぞれの違いに感心し、絵談議・山談義は2時間にも及びました。



梅の館内の庭園で

こうした時間が、登山とは一味違った喜びとなりました。

近くにありながら機会が無かった場所ですが、佐布里池(愛知用水の貯水池)を囲む広い敷地に、平日にかかわらず大勢の人が訪れていました。“コロナは何所へ?”—今後自由な行動が出来ることを願っています。

代表…石井仁

事務局…村中征也・岩田智与子

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画(令和5年年7月～9月分)

- <夏山>7月8日(土)9日(日) ☆
 山城:北アルプス
 山名:乗鞍高原・五色ヶ原
 リーダー:金谷 正起 募集:8名
- <夏山>7月15日(土)16日(日) ☆☆
 山城:後立山 山名:唐松岳(2,696m)
 リーダー:村瀬 恭平 募集:3名
- <夏山>7月15日(土)～18日(火) ☆☆
 山城:尾瀬 山名:至仏山(2,228m)
 リーダー:榊 将美 募集:10名
- <夏山>7月22日(土)23日(日) ☆
 山城:木曾恵那 山名:富士見台高原(1,739m) 横川山(1,619m)
 リーダー:田中 進 募集:10名
- <夏山>7月28日(金)29日(土) ☆☆
 山城:南八ヶ岳
 山名:編笠山(2,523m)・権現岳(2,715m)
 リーダー:倉橋 智司 募集:5名

- <夏山>8月6日(日)7日(月) ☆☆
 山城:八ヶ岳
 山名:硫黄岳(2,760m)～天狗岳(2,646m)
 リーダー:磯部 隆 募集:5名
- <夏山>8月25日(金)～27日(日) ☆☆☆
 山城:北アルプス 山名:槍ヶ岳(3,180m)
 リーダー:高松 信治 募集:7名

- <夏山>9月10日(日)11日(月) ☆☆
 山城:北アルプス 山名:常念岳(2,857m)
 リーダー:近藤 政仁 募集:3名
- <夏山>9月14日(木)～16日(土) ☆☆☆
 山城:北八ヶ岳 山名:硫黄岳(2,760m)・
 根石岳(2,603m)・天狗岳(2,646m)・
 中山(2,496m)
 リーダー:奥野 明美 募集:3名

- 9月10日(日) ☆
 山城:越美山地 山名:岩籠山(765m)
 リーダー:今津 英一朗 募集:3名

- 9月23日(土・祝) ☆☆
 山城:伊那谷の山 山名:守屋山(1,651m)
 リーダー:高松 信治 募集:3名

- 9月30日(土) ☆
 山城:木曾山系
 山名:寧比曾岳(1,120m)・笈ヶ岳(985m)
 リーダー:田中 進 募集:8名

申込み開始

支部友会員は山行日の3か月前から、優先は1ヶ月です。支部会員は山行日の2か月前から、山行の募集人員を超えない範囲で参加申し込みを受け付けます。

2023年<夏山>山行計画

申し込みは2山行まで、「2023年夏山への誘い」4月11日(火)に出席者は先行申し込み受け付けます。募集定員オーバーの場合4/13に抽選しお知らせします。
 メール申込は4/17午前6時から各リーダーへ。

次回支部友ミーティング 開催内容のお知らせ

- 「予告」第56回 4月11日(火)19:00～20:30
 テーマ:「2023年夏山の誘い」東海支部ルーム
 講師:山行リーダーが夏山コースを説明。
- 「予定」第58回 6月13日(火)
 会場:東海支部ルーム 19:00～20:30
 テーマ:「鈴鹿に於ける山岳遭難と実態と対応 Part II」
 講師:小古 真也氏(日本山岳会東海支部員)

支部友会員数 令和5年2月末現在/58名

リーダー連絡先

尾上 昇	onoe@onoe.co.jp
金谷 正起	kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp
榊 将美	m.sakaki@minds-consulting.jp
松本 陽子	yo-kom@nifty.com
田中 進	t-susumu@peace.ocn.ne.jp
磯部 隆	takass@yk.commufa.jp
高松 信治	takama2nobu3@yk.commufa.jp
今津英一朗	imazu.eiitirou@maroon.plala.or.jp
村瀬 恭平	hoshizakari@docomo.ne.jp
近藤 政仁	vft55ud55@gmail.com
倉橋 智司	ilyt6by8@qc.commufa.jp
奥野 明美	tac-okuno@mbi.nifty.com

会 務 報 告

【2022年11月常務委員会】

日時：11月24日(木)19時 ZOOM との並行開催

1. 支部長挨拶 (高橋)

- ・コロナは8波、支部の山行は行政に基づいて実施していく。
- ・本部の年次晩餐会開催予定、山田利行さんの講演がある。参加される方は盛り上げてほしい。

2. 総務委員会 (今津)

- ・新年会、1/15(日)テレビ塔北 SNOWPEAK 一週間前からキャンセル料金発生 1/6 に実施を決定する
- ・12/28(水)常務委員会 (リビエール)
- ・12/17(土)18(日)揖斐川町 揖斐の庵 常務委員会懇親
- ・12/24(日)猿投やまじ小舎 猿投の森づくり餅つき大会

3. 県岳連 (鈴木絵美子欠席) 行事スケジュールに変更あり。

4. 支部友委員会 (金谷欠席) 朝明ミーティング費用支出超過のため支部で補填→承認

- ・支部友山行 10/2(日)野坂岳、下山後支部員が駐車場近くの斜面で転倒骨折事故報告(今津)最後まで気を抜かないこと。

5. 山行委員会 (稲葉) 小林智佐さん、池戸美恵さんリーダーとしてデビュー

6. 亀の会 (加藤) 加藤代表の後継者人選探し難航中。

7. 猿投の森づくりの会 (和田)

- ・法人デー 11/26(土) ゆめファームで芋ほり、山桜フィールドで間伐・炭焼き体験と焼き芋。ロータリークラブなど30人
- ・わいがや講座 12/10 自然エネルギー活用の社会福祉法人見学予定
- ・なごや環境大学、納会餅つき 12/24(土)予定

8. 東海ユース (服田)

- ・11/26 入道ヶ岳 体験参加1名予定
- ・猿投山 猿投の森づくりの会の納会に参加予定

9. 東海支部報 (星) 原稿11月末が締切日。

10. 東海山岳 (星) 東海山岳12号、100部作製する。広告掲載が予定分集まっていない。PRをお願いしたい。

11. 青年部 (藤寄) クライミングリーダー育成が必要。計画を立てられるリーダーを育成していく。委員会枠を越え参加協力依頼。冬山合宿

は2月中旬予定している。

12. バリエーション勉強会 (高橋、山田) バリエーションやってみたい人の実践的な勉強会、12月中旬座談会を青年部と学生で実施して意見を聞いてからメルマガなどで参加者募集。座学はどなたでも参加できる。実技は夏山縦走経験者。ステップアップできる受け皿を作っていく。

13. 学生連盟 (丸岡) 11/6 ボランティア登山に参加した。いい経験になった。11/10、11/17 冬山の予定。毎週(木)勉強会、12/18(日)NHKからイベント参加依頼あり、年末年始は表銀座の予定。

14. 登山学校 (服田) 12/4(日)机上講習、【装備冬山】講師は装備委員長、千葉氏

15. ボランティア委員会 (前田) ・11月は3つの山行を実施できた。11/6(日)ブラインド登山夏焼城ヶ山、ブラインド登山者7名、支援者5名、ユース4名、学生3名総勢30名。

16. 遭難対策委員会 (高松)

登山届提出 62。レスキュー研修、事前講習 10/22(土)8名、11/20(日)実技訓練雨天のため中止。11/23 救急法講習、菰野町消防本部9名参加。装備講座 12/4(日)学校委員会、支部友委員会合同開催。

登山届、登山計画書提出の手引き作成中。
・遭難対策規程、要領の改定(2022年改定)については、現時点では会議資料に掲載されている2022年改定規定で実施する。質問点については以降で課題とする。

17. 写真展実行委員会 (伏屋)

・2023年2月21日~26日名古屋市民ギャラリー栄にて開催予定。申込みがまだ少ない。多数の申込みを期待している。ポストカードを12月支部報に同梱発送。
・写真教室 11/3(木)3回目終了。

18. デジタルメディア委員会 (井上)

・登山届は、数日のうちに同じアドレスから複数の登山届を送信した場合受信確認メールが返信されなかったが改善した。返信メールが届かない場合は井上委員長に連絡のこと。
・迷惑メールと判断され迷惑メールのフォルダーに入っている時があったが、しばらくは状況把握を行ってから適切な対策をとる。
・登山届は個人情報が含まれているので、セキ

ュリティに留意している。

19. 技術向上委員会（清水） 11/6(日)道迷い遭難防止講習会、左門岳、参加者5名。

・2月下旬か3月上旬NHK米山さんイグルー講習会。

・NHK中部ネイチャーシリーズ10年記念、12/18(日)パルコ東館上映会

20. 古道調査（西山） 12月から月一回くらい尾鷲の歩きやすい所に行く。メンバー12人になり、予定していた古道以外も案内していく。参加者：高橋、今津、服田、稲葉、前田、高松、西山、井上

(ZOOM) 加藤、和田、千葉、清水、伏屋、星、山田(利)、藤寄、丸岡

【2022年12月常務委員会】

懇親会でした。

【2023年1月常務委員会】

日時：1月25日(水)19時 ZOOMとの並行開催

1. 部長支挨拶（高橋）

・1月15日の新年会が盛会のうちに終了したことについて謝辞

・全国支部長会にて ①全国支部交流をより活性化させていこうというメッセージが出された。②広島支部から若手の交流が活発になされ、SNSの活用で若い人の入会も増え活性化しているという話がなされた。

・次年度の体制作りの中で各委員会間で横の連携を取り、単一の委員会では出来ないことも時間をかけて取り組んでいくよう考えている。そのためにも常務委員の皆さんの連携を図る取り組みをしていきたい。

2. 総務委員会（今津）

・支部員1月度入退会：退会5名

・新年会(1/15) SNOWPEAK 出席77名(内講演会のみ20名)

・ヤマトシプロジェクト寄付金について 3/31で締め切りチャレンジ基金へ入金処理を行いこの中より支援金を支出する。

・次年度総会日程：5月14日(日) OMC4F 講堂
・会計報告資料について、委員会予算を計上されている委員会は、監査委員会提出と同様に常務委員会資料として2月の常務委員会までに提出を。(残金は繰り越さずに会計に返金処理とすること)

3. 支部友委員会（金谷）

・12月と1月の山行は今のところ問題なく実施されている。2月の雪山についても同様に実施されることを楽しみにしている。

・2月14日の支部友ミーティングでは第2回「スマホアプリ等の活用について」鈴木慎吾氏に講師を依頼。(先回好評につき)

・支部友便り閲覧と支部友山行申し込みが、東海支部のHPでできるようデジタル委員に依頼
・予算額増加依頼については、予算額を決めて提出予定。

4. 山行委員会（稲葉）

・山行については問題なく実施されている。

・2023年度山行リーダー会議開催について3月23日を予定。目下リーダー候補に引き受けていただけるか答申中(諾否は1月末まで)

5. 亀の会（加藤）

・1月27日(金)運営委員会実施予定

代表交代で新年度の亀の会代表は村瀬恭平氏に依頼、承諾を得た。

・1月加入3 退会1 総数55名

6. 支部報173号案(星)

・4月1日発行予定 原稿締め切り2月末予定

7. 東海山岳(星)

・東海山岳、及び支部報合本版については今期中の発行を目指している。

・先回に比べて広告収入が半分以下の状態で少し赤字になるかと思われる。広告掲載を依頼できるところが皆様のお知り合いの中であれば是非ご紹介いただきたい。

8. 青年部（荒木）

・報告事項

①冬季合宿：日程 2/25(土)～2/26(日) 阿弥陀南稜 7名の予定(昨年の反省から荷物の軽量化を念頭に山行を実施予定)

②山田利行君主催のマウンテンクライムコミュニティという、(ZOOM)初心者から上級者までクライミングを含めて技術的なことを話合う場としての会が設けられている。(座学で技術論、一つのことについて特化した内容で21時開始、1h位) 不定期開催ではあるが2回開催された。興味深い話も聞けるので、次回開催期日がわかれば、案内アナウンスを行うので、他の委員会かも是非参加していただきたい。実施告知のチラシは特に無いが内容のレジメは事前に周知することは可能。ユーチューブで動画を録画しているのでそれを見ていただく事も可能。ライングループで括っているので其処で参加してからZOOMに入ってください事もできる。支部長か荒木又は青年部に声をかけていただければ紹介します。

9. 東海学生連盟（丸岡）

・今月の活動

学連定例会：次期役員選出

委員長：鯉江（名大4年）副委員長：木村（名工大2年）会計：山下（南山2年）

ゴザフェス委員長：矢野（名大2年）書記・広報：大森（大同）

・今後の予定

・冬山装備について点検のうえ充実を図ってきたい。

*支部長より「冬山関連について」日程を決め、最終目標をどこに設定するか計画立てて進めていくよう提言がなされた。

*質問に対して：東海地区の大学に山岳部がなくなったため連盟を作り東海支部が登山の指導、若い人の育成に努めている。（各大学ではサークルや研究会、クラブとして山岳部に準ずる活動をしている。）

10. 登山学校委員会（服田）

・1月山行：全て順調にカリキュラムを消化している。

11. ボランティア委員会（前田）

たんぼぼ登山については家裁からの委託を受けた後1年間の活動が開始される。

12. 遭難対策委員会（高松）

・登山届提出状況：提出数48件 チェック表添付 35件

・遭難対策委員会のホームページの作成をデジタルメディア委員会に試作依頼

13. 技術向上委員会（清水）

・イグルー講習会について(3/18, 3/19) 講師米山悟氏 現在7名参加予定 京都滋賀支部より6,7名参加予定、全体として30名くらいの参加を想定。希望者受付中

・2023年度の活動計画案について：資料通り（提案・希望・要望・受付中）

14. 古道調査（欠席）

・付随事項（支部長）

全国支部長懇談会の折に本部より熊野古道踏査依頼をうけた。先般ZOOMにて会議を行い関西支部と合同で行っていかうということになった。熊野古道については情報も多いので調査と言うよりも、他支部と交流を図れるイベントとしてルートを絞って何かできないか。実現は2025年を目指して計画。本部を中心にして動いてもらいサポートとしての参加形態をとればと考えている。

15. 愛知県岳連（欠席）

・猿投山山岳マラソン参加希望者は鈴木絵美子

さんへ申し込み願います。

16. 会計（奥山）

・決算の時期が来ているので準備を願いたい。

・会計報告は報告用フォーマット使用も可。
出席：高橋 今津 金谷 稲葉 加藤 服田 星 荒木 丸岡 前田 高松 清水 千葉 奥山

【2023年2月常務委員会】

日時：2月22日（水）19時（ZOOMとの並行開催）

1. 支部長挨拶（高橋）

2. 総務委員会（今津）

・支部員退会4名、入会3名。

・36回東北、北海道地区集会 7月1日2日、2名参加予定。

・ヤマトシプロ寄付金、2/10現在寄付があり。チャレンジ基金へ入金。

・総会5/14（日） OMC4階講堂。

・4/8（土）、9（日）猿投の森山桜フィールドでの常務委員会懇親会。テント張る。料理持ち寄り。

・夏フェス 6月3日4日、東海支部の講師陣で講演の予定。詳細はこれから。

3. 支部長（高橋）より、次年度のプラン説明

【海外登山】委員長変更 高橋玲司⇒山田利行 高橋氏は副委員長

・カナディアンロッキー登山隊の計画（案）

2023～2025（三か年計画）本部事業120周年記念事業、2023.6.23～7.2 山田利行、草野駿希

・韓国交流登山（案）2023or2024 韓国山岳会と交流、登山クライミング

【支部懇親会】2023.9.23～24 水上温泉、群馬支部

【古道調査】熊野古道、本部と打ち合わせて進める

【交流委員会（仮称）】本部、支部の交流。支部間の交流事業促進。前田さん企画のとりまとめ。

【事故】青年部、2023.2.5 夏沢鉱泉

【播隆記念碑（東海支部の名前で石碑がある）】揖斐川町旧春日村さざれ石公園上部。8/20 地蔵祭に協賛。

【SNS】東海支部で一本化。Twitter、Instagram、Facebook 会員獲得に繋げる。

4. 支部友委員会（金谷）

・入会1名。2/14 支部友ミーティング、鈴木慎吾さんの「スマホアプリ等の活用について」

5. 山行委員会（稲葉）

・豊田さん新規リーダー。伊藤祐リーダー来年度の委嘱見送り。山田リーダー、大矢リーダー、鈴木愛リーダー辞退。新規山行委員候補、荻山さん

6. 亀の会（加藤）

・2/16 三ヶ根山・3/23(木)長寿お祝い山行、菰野富士

・2023年度の計画 4月から亀の会代表は村瀬恭平さん。今までは平日の山行だったが4月以降は土日の山行を主とする。自主企画は山行担当者の都合を優先する。

・入会3名、退会1名。会員数55名。・80歳以上が42%、75歳以上が74%全体的に年齢が上がっている。

7. 猿投の森づくり（和田）

・わいがや講座 2/11 山口ダム見学、塚原古墳群見学、猿投の歴史を勉強した。

・なごや環境大学 2/25 「シイタケ植菌作業を体験しよう」

8. 東海ユース（服田）

・4月から名称変更、入会資格緩和する

9. 青年部（荒木）

【事故報告】 2/5(日)夏沢鉦泉アイスクライミング、青年部会員男性1名、無所属男性1名の2名参加。無所属男性リードがアイスクライミング中に墜落。背骨の細かい個所に微小のヒビが入った。現在回復

【課題】基本スキル・技術的な部分の経験不足。登山計画書の書き方、提出方法のレクチャーを行う。ファーストエイド、セルフレスキューのスキルを身につける。雪山はアプリに頼るのは危険との意見があった。

10. 東海学生山岳連盟（鯉江）

・3月に一泊二日の雪山山行の予定。

11. 東海支部報（星）

発行費用の低減予定。

12. 東海山岳（星）

【東海山岳12号】 販価3,000円の予定、発行部数100部（本部などに寄贈分含む）、CD版は購入希望者分作成する。製本代は支部より3月決済で支払いと決定。

【支部報合本版】 購入希望者にCD版を作成し販売予定。次回審議する。

13. 登山学校（服田）

【机上講習】 3/4(土)「春山の気象」講師、大矢康裕さん。遭難対策委員会、支部友との合同開催。

【7月開校予定】 石田CL、鬼頭CL、稲葉CL、

前田CLの4クラス。吉田俊紀さんはSL。支部友で8人入校希望者あり。

14. ボランティア委員会（前田）

・ブラインド登山、5/13 三河富幕山
・ひまわり登山、3/12 局ヶ岳
・SON登山、5/27or/28 三河三ヶ根山
・タンポポ登山、6/2 猿投山

17. 遭難対策委員会（高松）

・1月登山届72件、チェック表48件提出。
・登山届・登山計画書の手引き作成中
・委員会山行、2/23(木) 御在所雪崩訓練

18. 写真展実行委員会（伏屋）

・第18回写真展開催。2023年2月21～26日、名古屋市民ギャラリー出展数33名、48点。中日新聞県内版に掲載。

19. 技術向上委員会（清水）

【イグルー講習会】 2023年3月18日～19日 米山悟講師

【安全登山教室の予定】 無雪期、秋ごろ。積雪期、12月上旬頃。

17. 古道調査（西山）

・4月、5月大台ヶ原頂上～尾鷲の予定。
・2024年本部主催のイベントと調査、熊野古道、奥駈

22. 各委員会から会計報告

出席：高橋、今津、服田、和田、前田、高松、西山、清水、石田（文）、鯉江

（ZOOM）金谷、稲葉、加藤、荒木、伏屋、星、丸岡

ル ー ム 日 誌

—・—	12月	—・—・—・—・—・—
	大会議室	/小会議
1(木)	写真展実行委員会	
2(金)		/古道塩の道
4(日)	東海ユース	/登山学校運営委員会
5(月)	支部友委員会	
6(火)	県岳連	TNCC
7(水)		/青年部
8(木)	自然保護委員会	
12(月)	登山学校運営委員会	
13(火)	支部友ミーティング	
14(水)	山行委員会	
19(月)	図書委員会・読図会	
20(火)	ボランティア委員	
21(水)	東学連	技術向上委員会
22(木)	正副支部長会議	/総務委員会

- 26(月) 支部友誼図会
 27(火) 遭難対策委員会
 28(水) 常務委員会
 ─・─ 1月 ─・─
 3(火) 県岳連 /TNCC
 4(水) 青年部
 5(木) 写真展実行委員会
 6(金) 古道塩の道
 10(火) 支部友誼委員会
 11(水) 山行委員会
 12(木) 自然保護委員会
 13(金) 登山学校運営委員会
 14(土) 猿投の森づくり自然観察会
 15(日) 支部新年会
 16(月) 図書委員会・読図会
 17(火) ボランティア委員会
 18(水) 東学連 /技術向上委員会
 19(木) 正副支部長会議 /総務委員
 23(月) 支部友誼図会
 25(水) 常務委員会
 27(金) 亀の会
 31(火) 遭難対策委員会
 ─・─ 2月 ─・─
 1(水) 青年部 /TNCC

- 2(木) 写真展実行委員会
 3(金) 古道塩の道
 6(月) 支部友誼委員会
 7(火) 支部友ミーティング
 8(水) 山行委員会
 9(木) 自然保護委員会
 13(月) 登山学校運営委員会
 14(火) ボランティア委員会
 15(水) 東学連 /技術向上委員会
 16(木) 正副支部長会議 /総務委員
 20(月) 図書委員会・読図会
 22(水) 常務委員会
 27(月) 支部友誼図会
 28(火) 遭難対策委員会

会員異動

入会：鍛次真由美(17017)

退会：川上真澄(16333) 辻 章行(10193)
 油井孝夫(16364) 村越 稔(14832)
 大塚正数(15673) 菊池 徳(15852)
 福井玲司(16966) 松本洋子(16156)
 伏屋 満(16632) 近藤厚史(16349)
 鈴木 隆(15252)

I N F O R M A T I O N

【総務委員会からのお知らせ】

〈支部総会のお知らせ〉

令和5年東海支部総会は以下のように開催します。

日 時：5月14日(日) 総会開始時間 14時30分
 から 懇親会開始時間 16時50分から
 場 所：OMCビル4階講堂

※ 4月中旬に、総会資料および出欠ハガキ(委任状含む)を送付いたします。

〈第8回夏山フェスタの開催のお知らせ〉

日 時：2023年6月3(土)、4日(日)

場 所：ウインク愛知

内 容：山小屋、登山用具店などが集まる山岳総合イベント

主催：夏山フェスタ実行委員会

(構成＝日本山岳ガイド協会、日本山岳会東海支部、中部経済新聞社)

総務委員長 今津英一朗

【ボランティア委員会からのお知らせ】

・春のブラインド登山を予定しております。

日 時：5月13日(土)

行 先：富幕山(563m)

集合場所：8時 金山総合駅 JR切符売場付近

・SON愛知・山岳会と一緒に登山2023は、

日 時：5月27日(土)

行 先：三河・三ヶ根山(350m)

集合場所：9時 JR三ヶ根駅改札口前

問い合わせ等は、ボランティア委員会まで

maedaiq@gmail.com

ボランティア委員長 前田隆久

編集後記

第18回の岳人写真展が開催された。コロナ禍では、登山活動もままならないなか、出品した会員諸氏の自慢の一枚が並んでいた。久しぶりに時間をかけて作品に見入ってしまった。継続は力なり。写真展実行委員会の皆様に感謝と共に、今後に期待したい。

星 一男

SINCE 1975
mont·bell
FUNCTION IS BEAUTY

最新情報はこちらから
www.montbell.jp



0088-22-0031 06-6536-5740

株式会社 **モンベル** 【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス

法務相談は行政書士にお任せください!

相続 会計 許認可

1時間無料相談

あなたの不安を解決に導きます

遺言書、遺産分割協議書、
法定相続情報一覧図作成、任意成年後見の相談など



西山行政書士事務所 ☎052-961-6506

名古屋市中区丸の内3-21-21丸の内東桜ビル1004
www.nygs-office.com

久屋大通駅
徒歩1分

『東海支部報』では、
広告を募集しております

表4(裏表紙)掲載

※掲載のご希望・お問合せは

jactokai107@gmail.com まで

***** OMC *****

住いのコンサルタント

(有) 富士見企画

〒460-0014
名古屋市中区富士見町8番8号

オフィスに関する悩み事、丸天産業が全て解決します。

ファシリティマネジメントによるオフィス構築や
デザイン、インテリアやセキュリティなど
オフィスのすべてが揃っています。

オフィスのお困りごとを丸がかえでお応えいたします。



郵送無料 Honesty

コンサルティング事例集

オフィスに関するお悩み事の解決事例が載っています。
お申込みは下記までお電話ください。

株式会社 丸天産業

本社 〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄5丁目10-34
TEL: 052-241-3686 FAX: 052-241-0457

企画・デザイン・印刷



株式会社 浅井隆文社

〒461-0044 名古屋市東区矢田東1番22号
TEL (052)719-0677 FAX (052)719-0678
E-mail: info@asai-rbs.co.jp